

# 娘よ

## 検証「いじめ自殺事件」

□1□

一九九一年九月、町田市の中学二年生の少女が鉄道線路に身を横たえて自ら命を絶った。娘はなぜ、死ななければならなかったのか。遺書はなく、残された両親の問いかけへの答えは出ないまま、八年が過ぎようとしている。いじめの存在を疑う両親は事件後に在校生が書いた作文の公開を求めて九三年、裁判を起し、今も争っている。いじめ、体罰、不登校……。教育現場で難局に直面した親たちが共通して口にする学校不信、それを生む情報疎外。「厚い壁」に挑んだ父と母の闘いの足跡をたどる。



①晶子さんの思い出を語る両親の前田千恵子さん(左)と功さん  
②91年6月に行われた同中の体育祭で

# 不信

それは、突然の電話だった。それが、突然の電話だった。「本当のことを知りたいだけなのに。受話器の向こうで、沈んだ声が続けた。「学校は言い逃ればかり……。どうしたらいいの？」

町田市郊外の新興住宅地の小さな一軒家。一か月ほど前、裁判関係の書類を整理していた少女の母親は手を休め、耳を傾けた。

それは、突然の電話だった。裁判や集会を通じて母親の連絡先を知った全国の親たちから、同じような電話がかかってくる。多い時は週に三、四本も。すがるような声はどれも「学校が信じられない」と訴える。

母親はいつものように、自分の体験をゆくりと話した。約二時間後、女性は「初めて気持ちがかかってもらえ

直前、少女が学校で孤立感を父親が頼んだ。事件後、学校は約八百人の全生徒に作文を書かせていた。その中に少女の自殺の手がかりがあるかもしれない」と思った。しかし、「学校の調査に期待していない。当時を振り返って、父は親は言う。青春時代を松山市で過ごし、中学で柔道、高校で水泳に励んだスポーツマン。いじめ、校内暴力など無数の学生時代だった。大学卒業後は大阪府内の保険会社に

直前、少女が学校で孤立感を父親が頼んだ。事件後、学校は約八百人の全生徒に作文を書かせていた。その中に少女の自殺の手がかりがあるかもしれない」と思った。しかし、「学校の調査に期待していない。当時を振り返って、父は親は言う。青春時代を松山市で過ごし、中学で柔道、高校で水泳に励んだスポーツマン。いじめ、校内暴力など無数の学生時代だった。大学卒業後は大阪府内の保険会社に

# 真相解明に背向ける学校

## 手がかりの作文公開せず

電話の主は昨春秋、高校生のわが子を自殺で失った女性だった。「私たちの時と同じだ。同情に駆られる母親に、女性には、背景にあつたいじめの事実を学校が理解してくれないと、嘆いた。

た」と言つて電話を切った。縫いぐるみが飾られた仏壇が、少女の笑顔の遺影が見つめていた。

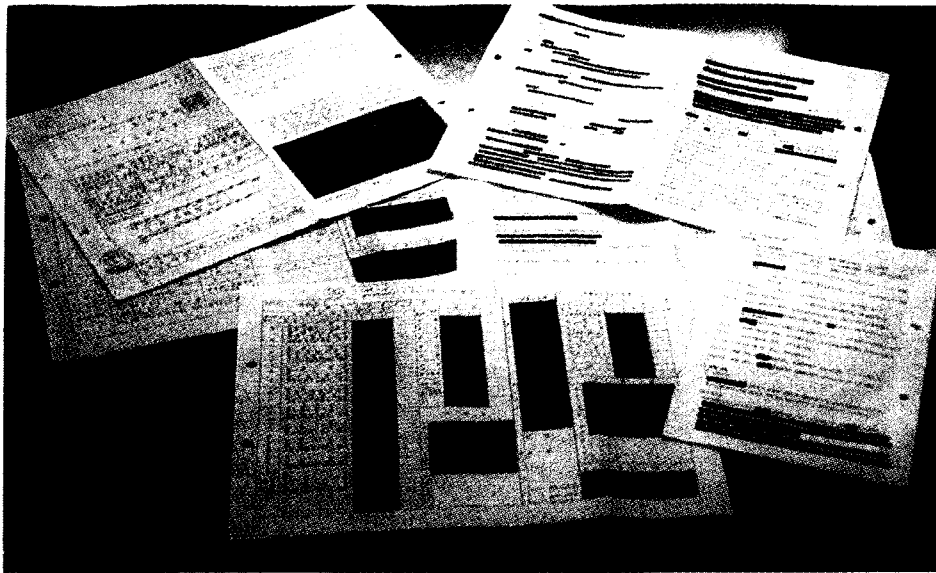
公衆電話でかけている音の勤め、十六年前、都内に転勤して来た。少女の兄も同じ中学で学んだ。二人の場合、問題もなく、父親と学校とのつ

【事件経過】91年9月1日午後7時35分ごろ、JR横浜線の成瀬駅構内で、町田市立つくし野中学の二年生だった前田晶子さん(当時十三歳)が鉄道自殺した。父親の功さん(54)、母親の千恵子さん(53)は91年11月、市の情報公開条例に基づき学校側が作成した市教委への報告書や生徒たちの作文などの公開を求めたが、ほとんどが非開示とされた。両親は、このうち、作文



両親はいじめを疑った。「仲良しだったグループの中で無視されていた」「借りたビデオテープの返却が遅れたことを責められていた」。何人かの女子生徒の話で、死の

「事件」に直面した学校は違つていたという。消しを求めて93年1月、東京地裁に提訴(一審敗訴、控訴中)。95年2月には、学校側の調査・報告が不十分として損害賠償訴訟も起している(二審係属中)。



# 娘よ

## 検証「いじめ自殺事件」

■ 2 ■

### 墨塗り

# 開示書類に70か所も

## 常任委論議、親にも秘密

「悲しみの極みまで行った人間はこんな感じになるんだろうか」。元町田市議の吉崎真相を知りたいという強い思いが痛いほど分かった。この場で市教委の教育部長に言った。学校生活の中で、子どもさんたちは衝突や接触を続けながら社会性を身につけていく。ですから今回の事件についても、それが自殺の原因かどうかということになると、はっきり特定はできないと考えています」。両親が教委の担当者の陳述による紙は、第三者のプライバシーを侵害するおそれがあるなどの理由で、全面非開示だった。

「先生には先生の立場、学校には学校の立場があつて、今ははっきりものを言うことができないのだと思う。学校の調査を信じて待ちたい」。同じころ、母親は知人にこんな話をしている。学校への期待は、まだわずかに残っている。疑う「いじめ自殺」の遠回し

「当事者の夫の親にも聞かせられない話つて一体、何だろつ」。不審に思った。しかる時は、事情も分からず待つだけだった。議事録では、午前十一時半の。しかし、それはあちこちに黒塗りが施された部分開示の六枚の書類だった。市議会で閲覧された時にもまして、七十か所余りが塗りつぶされていた。同時に申請した娘の手紙は、第三者のプライバシーを侵害するおそれがあるなどの理由で、全面非開示だった。

請求に踏み切る直前、市教委を訪ねた両親に担当者

市議に相談したのだ。吉崎さんが母親に会ったのは、市役所近くの喫茶店だった。事件から間もなくなのに、母親が声を荒らげることは一度としてなかった。「気づいてやれなかった自分たち親が悪いんです。言葉が途切れた時、母親は静かに涙を流した。三列ある傍

十一月十一日、市議会の第一委員会室。文教社会常任委員会で事件が取り上げられるのを待った。記憶では、議員たちが席に着くと間もなく、委員長が「秘密会にしませられ、閲覧後は回収された。両親の手元には、その報

午前中の質疑は正午前に終わった。午後一時、母親は席に戻って午後の委員会が始まるのを待った。記憶では、議員たちが席に着くと間もなく、委員長が「秘密会にしませられ、閲覧後は回収された。両親の手元には、その報

と、この間に、議員たちには別室で、ある文書が配られていたという。教頭がまとめた手書きの事件に関する調査報告書と死の約二か月前、少女が友人にあ

「死んでしまった以上、娘にかかわる情報は娘のもの。そんな思いで娘の死の真相を追う両親にとって、現行の情報公開制度は余りにも制約が多

開示された皇子さんに関する個人情報。名前以外はほとんどが黒く塗られた文書もある

両親の手元には、その報

# 娘よ

検証「いじめ自殺事件」

3



# 裁判

▲  
審理が続けられている東京高裁前で相談する前田さん夫妻

## 傷跡

# 心に残る娘の面影

## いじめ認めぬ学校に反感

「いじめがなかったなんて、ウソ。知らなかったとすれば、先生たちは相当鈍感ですよ。少女が自殺した一九九一年九月当時、同じ中学の下級生だった青年(20)は、言葉に力を込めた。

現在、都内の私立大学の三年生。中学時代、青年も何度かいじめの対象になったという。

中学に進学して間もないころ、校庭に沿った通路を歩いていると突然、首の後ろに激痛が走った。「竹ぼうきの威力がどれくらいあるか実験だ」。クラスメートから恐れられていた二人組の上級生だった。

少女が自殺した後も、いじめは止まらなかった。一年上は昨年五月、少女の死後に先輩の卒業式の日、学校近くの公園に連れ込まれた青年は、十人以上の男子生徒から「ぼ(ぼ)にされた」。

卒業生が気に入らない先輩を殴る。卒業リンチは当時、恒例になっていたという。学校に敵対する私たちに協力しても、何の利益もない。よく勇気を出してくれただね」。少女の母親は、青年の後ろ姿を傍聴席の最前列で見守った。心の中で何度も頭を下げていた。

事件当時は口を固く閉ざしていた生徒たちが、高校を卒業するあたりから、少しずつ事件について語り始めている。両親側の要請に応じ、陳述書を提出した卒業生は、この学校にはいじめという問

「学校に敵対する私たちに協力しても、何の利益もない。よく勇気を出してくれただね」。少女の母親は、青年の後ろ姿を傍聴席の最前列で見守った。心の中で何度も頭を下げていた。

事件当時は口を固く閉ざしていた生徒たちが、高校を卒業するあたりから、少しずつ事件について語り始めている。両親側の要請に応じ、陳述書を提出した卒業生は、この学校にはいじめという問

よつ心がけ、財布は身から離れていた。

「学校は娘を記録上も抹殺さず、カサは教室に置いた方が安全。あらゆることを教えたくれた治安の悪い学校に感謝の意を表したい」。少女が自命を絶つたのは、卒業文集にそんな作文さえ掲載されるにそんな作文さえ掲載される

件後、少女の遺品と一緒に学校側から手渡され、大事にしまっていた一枚の写真。暗い表情をした娘の姿が、そこにあった。

少女の幼なじみで中学でも同級生だった女性が三年前、裁判に証人として立った時の一言が、母親の記憶に深く刻み込まれている。

「あっ、こちゃん」。女性はその時、少女を愛称で呼んだのだ。その言葉を聞いた瞬間、母親は溢れ出る涙をおさえることができなかった。

教師たちは、事件の記憶を世間からすべて消去しようと、少女の写真をどうするか、少女とともに同じ時代を過ごした友人たちの心の中には、少女の面影がしっかりと生きていた。

だ、娘の面影がしっかりと生きていた。流した涙は、それが確認できた喜びの涙だった。

「いじめがなかったなんて、ウソ。知らなかったとすれば、先生たちは相当鈍感ですよ。少女が自殺した一九九一年九月当時、同じ中学の下級生だった青年(20)は、言葉に力を込めた。

現在、都内の私立大学の三年生。中学時代、青年も何度かいじめの対象になったという。

中学に進学して間もないころ、校庭に沿った通路を歩いていると突然、首の後ろに激痛が走った。「竹ぼうきの威力がどれくらいあるか実験だ」。クラスメートから恐れられていた二人組の上級生だった。

少女が自殺した後も、いじめは止まらなかった。一年上は昨年五月、少女の死後に先輩の卒業式の日、学校近くの公園に連れ込まれた青年は、十人以上の男子生徒から「ぼ(ぼ)にされた」。

卒業生が気に入らない先輩を殴る。卒業リンチは当時、恒例になっていたという。学校に敵対する私たちに協力しても、何の利益もない。よく勇気を出してくれただね」。少女の母親は、青年の後ろ姿を傍聴席の最前列で見守った。心の中で何度も頭を下げていた。

事件当時は口を固く閉ざしていた生徒たちが、高校を卒業するあたりから、少しずつ事件について語り始めている。両親側の要請に応じ、陳述書を提出した卒業生は、この学校にはいじめという問

よつ心がけ、財布は身から離れていた。

「学校は娘を記録上も抹殺さず、カサは教室に置いた方が安全。あらゆることを教えたくれた治安の悪い学校に感謝の意を表したい」。少女が自命を絶つたのは、卒業文集にそんな作文さえ掲載されるにそんな作文さえ掲載される

件後、少女の遺品と一緒に学校側から手渡され、大事にしまっていた一枚の写真。暗い表情をした娘の姿が、そこにあった。

少女の幼なじみで中学でも同級生だった女性が三年前、裁判に証人として立った時の一言が、母親の記憶に深く刻み込まれている。

「あっ、こちゃん」。女性はその時、少女を愛称で呼んだのだ。その言葉

を聞いた瞬間、母親は溢れ出る涙をおさえることができなかった。

教師たちは、事件の記憶を世間からすべて消去しようと、少女の写真をどうするか、少女とともに同じ時代を過ごした友人たちの心の中には、少女の面影がしっかりと生きていた。

だ、娘の面影がしっかりと生きていた。流した涙は、それが確認できた喜びの涙だった。

# 娘よ

## 検証「いじめ自殺事件」

4



「平穏な日常活動のため、四年末、町田市の自宅のテレビ取材は「遠慮下さい」と少女の画面に、一枚の看板の文字の自殺から約三年後の一九九九年が映った。それは、ある中学

## 大河内君事件

仏壇の前で清輝君の思い出を語る大河内祥晴さん(愛知県西尾市の自宅で)

# 学校変えた親の決意

校を取り囲むフェンスに掲げられた白殺の原因を説明する手がかりがあった。「学校の平穩が一人の子供の死より優先する」と、祥晴さんは事件を振り返り、となど、あるものか。父親は「淡々と話した」。

「清輝君の自殺の背景に何があったのか、調査してしまわなければならない。学校側は当初そう縲りの画面に出ていたのは、事件後返すだけで、自殺の原因について何も語ろうとしなかった。」「親と一緒に調べようという姿勢がない。学校という所はなぜともなさんだ。」「死の翌日に在校生が書いた作

【大河内清輝君いじめ自殺事件】 94年11月27日、西尾市立東部中2年の大河内清輝君(当時13歳)が自宅の裏庭の木で首つり自殺した。遺書には同級生4人から数万円単位で現金を要求されたことなどが書かれていた。いじめた4人の生徒は恐喝罪で家裁に送られ、少年院送致などの処分を受けた。

## 遺書公表 きっかけ 落ち度認め、作文手渡す

絡先を番号案内で調べ、電話をかけた。自分の経験を聞いて欲しいと思ったから。」「悲しみに暮れる人に会うべきだろう。」「直前まで迷ったが、最後には会いたい気持ちで勝った。翌日には新幹線の車内にいた。」「西尾市の旧家の応接室。同じ体験を共有する二人の父親が初めて向きあった。」「ささいなことでもいい、話を聞きながら、父親は考えを述べた。学校の情報隠しの実態、在校生の父母や地域からの白眼……。父親も自分の体験を語った。二人の話は、新幹線の終電に間に合うぎりぎりの時間まで続いた。」「清輝君の事件では、いじめの様子を克明に記した遺書が死後四日たった十二月一日、から事情を聞いていた祥晴さん

事件は、報告書の一部や作文の公開を今も拒否し続ける。町田市のケースとは対照的な経緯をたどった。」「自殺の原因となる事実を把握しなければ、問題を解決するための模索すら始まらない。」「祥晴さんは七十年十月、後、続けた。」「遺書の公開をめぐって争い、東京高裁にて変わった」



娘が自ら命を絶ったJR成瀬駅から勤め先に向かう父・前田功さん

# 娘よ

## 検証「いじめ自殺事件」

■ 5 ■

父親は、町田市の自宅からその線路を見下ろすホーム毎朝、品川区内にある中堅損保で、父親は電車を待つ。保の子会社に通っている。「仕事が趣味のような人間娘と一緒に通ったスイミンだったと、父親は振り返る。クラブの前を行き過ぎる、取引先とのゴルフに休日費いつももの道。家を出て十分ほやし、連日のように残業した。とで、JR横浜線の成瀬駅が会社を休んだ。ほほとんど見えなくなる。九二年九月、少ない。女が自ら命を絶った場所だ。右肩上がりの経済が続いた

### 父の願い

# 闘う相手は「情報隠し」

## 「事件、まだ思い出にできぬ」

時代と父親のサラリーマン生活は重なる。競争社会で生き残り、自分と家族が経済的に繁栄することが「人生の勝利者」。そう信じて疑わなかった。

「何事も我慢」「弱音を吐かず」に生きてきた。最期の瞬間まで自分に「弱者」の烙印を押し付けていた。

学校の在校生が書いた作文の公開を求める裁判は六年目に達した。学校の調査・報告義務を問うもう一つの裁判も続いている。

少女は生前、「いじめ」に悩んでいた。存在すら知らなかった市の情報公開制度について調べた。裁判の支援者向けの報告会にも参加している。

織の中心メンバーとして、学をみつめている自分に、ふと気がつくことがある。毎朝交わらざる談合や税金の無駄遣いと人波。その中で涙を流す男の姿に気がつく者はいない。

少女は生前、「いじめ」に悩んでいた。存在すら知らなかった市の情報公開制度について調べた。裁判の支援者向けの報告会にも参加している。

「何事も我慢」「弱音を吐かず」に生きてきた。最期の瞬間まで自分に「弱者」の烙印を押し付けていた。

学校の在校生が書いた作文の公開を求める裁判は六年目に達した。学校の調査・報告義務を問うもう一つの裁判も続いている。

少女は生前、「いじめ」に悩んでいた。存在すら知らなかった市の情報公開制度について調べた。裁判の支援者向けの報告会にも参加している。

織の中心メンバーとして、学をみつめている自分に、ふと気がつくことがある。毎朝交わらざる談合や税金の無駄遣いと人波。その中で涙を流す男の姿に気がつく者はいない。

を禁じた姿は、父親が考える「いい子」の究極の姿と、娘には映ったのではないかと、後悔の念が、今もしばしば父親をさいなむ。

書を作ったり。父親は通勤電車の中で資料に目を通す。仕事が終わった後、徹夜で作業することを珍しくない。

「情報隠しは学校だけでなく、親、母親、少女の姉、兄が助けてこなければ。父親は苦しげにつぶやいた。いい子でなくてもいい。生きててほしいかった」

少女の死後、通っていた町田市の市民オンブズマン組で、娘が若い命を終えた線路が担当しました。

少女の死後、通っていた町田市の市民オンブズマン組で、娘が若い命を終えた線路が担当しました。

少女の死後、通っていた町田市の市民オンブズマン組で、娘が若い命を終えた線路が担当しました。

少女の死後、通っていた町田市の市民オンブズマン組で、娘が若い命を終えた線路が担当しました。

少女の死後、通っていた町田市の市民オンブズマン組で、娘が若い命を終えた線路が担当しました。

(おわり)